



下関西高等学校 進路だより

令和5年7月号 進路指導部

Hard work is the key to success

上記の「**Hard work is the key to success**」は昨年度も7月にメッセージとして伝えたフレーズです。承知のように、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから500日が経過しました。ウクライナは反転攻勢を本格化させるため、欧米側にさらなる軍事支援を求める一方、ロシアは占領地の防御を固め、核戦力によるけん制を強めており、まだまだ終わりは見えません。ということは、現在も両国における君たちの同年代の若者は、紛争地帯で死の恐怖に怯え、自分の将来の目標を実現するための機会が閉ざされていることは紛れもない事実です。我々はその事に敏感にならなければいけないと思います。私事ですが、今から約30年前の1990年12月にフランスのマルセイユという町にいました。そこで、偶然、出会った19歳のフランス人と仲良くなり、多くの話を彼としましたが、別れ際に「実は明日から僕は徴兵される。もちろん、戦争には行きたくないし、とにかく怖い。日本は多国籍軍には参加しないと聞いているが、それはずるいと思う。」と真正面から言われました。その3週間後、クウェートに侵攻したイラクに対しアメリカ主体の多国籍軍が攻撃を加えた湾岸戦争が始まり、そこにフランス軍も参加しました。マルセイユで出会った彼がその後、どうなったかは不明ですが、その時に「僕は安全な場所にいさせてもらっているが、それに甘えていけない。徴兵に行った彼の分も自分に何ができるかわからないけど頑張ろう！」と思いました。あれから多くの時間が経過しましたが、今も世界は平和からほど遠い状況です。だからこそ、自分で自分の将来をデザインできる可能性が与えられ、学ぶ環境が保障されている西高生には全力で学ぶミッションがあると思いますし、それをしっかりサポートしていく責任が自分にはあると私は考えています。3年生は高校生として最後の夏を迎えます。十分な手ごたえを感じて終えられるように取り組んでください。一緒に頑張りましょう。

また、その中で君たちにはしっかりと「**学びの自立**」を確立して欲しいと思います。「学びの自立」とは一体何か、明確な定義は実はありません。だから、この言葉について君たち一人一人が自問自答をしてください。先日、教育実習に来た先生たちにもこの言葉を投げかけたところ、それぞれ誠実で素敵な答えをいただきました。今回、それらを紹介するので、参考にして今後の学びに活かしてください。

山口大学 理学部 4年 山本清司先生

私が学びにおいて考える重要なことは「自己理解」だと考えます。

私は大学で数学を専攻しており、大学での数学は高校数学と違い、とても抽象的でした。大学の数学では計算はほぼなく、証明を重点的に取り組み、当たり前だと思うことでも、「なぜそうなるのか」を理解しないと行けません。例えば「 $1+1=2$ を証明せよ。」という問題も大学の数学で扱います。小学生でもできると考えるかもしれませんが、ではここでいう「1」とはなにか。「+」とはなにか。もっと言うと自然数とはなんなのかを考えなければならないのです。高校まではある程度数学が好きで得意としていたのですが、大学に入った途端、1回の講義で理解することができないのです。ここで大切なのは、講義で分からなかったことをそのままにしないことです。講義や授業を受けることだけに意味を持たせず、自分がどれくらい理解したかを重要視すること。そうすることで、これからの学習の必要性が見えてくると思います。

(次のページへつづく)

九州大学教育学部 4年 森智咲先生

私は大学での学びの経験から「学びの自立」について感じていることを述べたいと思います。大学生になったら高校のように決められた時間割はなく、自分で興味のある授業を選びます。さらに、進むコースや研究室、卒業論文のテーマを選択したり、免許や資格を習得するのか決めたりするなど自分で決めなければならないことがたくさんあります。自分の意思を反映できる一方、判断力や実行のためのスケジュール管理能力が必要です。楽をすることもでき、全て自分のやる気や情報収集能力に任されています。

また、大学では自分の進んだ学部や学科の専門的な知識を深く学びます。入学してから自分の学びたいことと違ったとならないよう、大学や学部は自分で情報を収集して、自分でよく考えて選ぶことが大切だと思います。なりたい職業が見つからない人も、関心のある分野や、自分が興味を持って4年間学びたいと思える分野を探してみてください。大学は今までにない出会いもたくさんあり、とても良い経験になります。高校生のうちから自分で決める、自分で考えて取り組んでみるという経験をしておくことで、大学生活も有意義に過ごすことができると思います。

法政大学経済学部 4年 宵川真之先生。

皆さんは、普段の授業の中で「学びの自立」を実感することがありますか？残念ながら、私は現役時代それを授業の中だけで感じることはほとんどありませんでした。なぜなら、私が思うに「学びの自立」は教室の中だけでは到底完結し得ない存在だからです。

皆さんが学校で習わなければならない内容は学習指導要領という取り決めで決まっているため、教室の中で行われる授業は、突き詰めれば日本中どこでも同じ内容にならなければなりません（違いがあるとすれば、それは教員のテクニックや熟練度といった程度の違いだけです）。つまり、授業とは、『知っている』教員が、『知らない』生徒に対して、指導要領に従いながら知識を教えていく試みのこと」と言うことができ、それは結局のところ、教室の中で受ける授業は、どれほど教員が工夫して生徒に考えさせる内容を取り入れたとしても、根底の部分では「指導要領の中身を伝える」という受け身の学びにしかかなり得ないということを意味しています。

では、そのような環境において、わたしたちは「学びの自立」、または「自立した学び」というものを一体どこに見出せばよいのでしょうか。私は、それは教室の「外」にあるものだと思っています。1つは教室の外で行われる行事やイベントに積極的に参加し、そこから様々な気づきを得られた瞬間、もう1つはもっと生活に近い部分で、教室の中で学んだ学習内容が、教室の外側——街を歩いているときやスマホをいじっているとき——に日常と繋がる瞬間、それらの瞬間こそ、学びが自立する瞬間であり、極端な言い方をすればそれを味わうために、普段教室の中で学習をしているということもできるでしょう。また、先ほど教室内での学びは受け身にしかならないと書きましたが、教室の外で学びの自立の経験を得ることで、教室の中での受け身な学習にも学ぶ意味を見出すことができ、それが主体的な学びというものにつながっていきます。

学習、勉強というどうしても教室の中での学びに意識が向いてしまうこともあるかと思いますが、教室内での学びをより深め、学ぶ意味を見出すために、教室の外でどんな学びが得られるのか、ぜひそのアンテナを磨きながら高校生活を送ってみてください。

以上です。実習の先生方、素晴らしいメッセージを在校生に贈ってくれてありがとうございました。

(文責・松村)